

撮ることの罪——土本典昭の映画的思考

吉川 孝

水俣病をめぐる一連の経緯において、患者さんやその家族による闘いを支援する人たち（支援者）が大きな役割を果たしてきた。水俣のみならず東京でも支援組織が結成され、裁判の公判に全国の学生が集結し、演劇人が表現を通じて支援を呼びかけた。ときにはその支援の輪のなかに、加害企業のチッソの従業員や企業側にあった水俣市などの公務員も含まれていた。そうした活動のなかで、外から水俣に移り住んだ者もいる。彼らはチッソとの交渉や認定をめぐる裁判などを患者さんとともに闘い、全国に水俣の実像を伝え、患者さんの雇用の場をつくり、日常生活を支えた（いまもその営みは続いている）。そこには、医師・原田正純のいう「見てしまった責任」が働いていたのだろう。

見てしまうと、そこになにか責任みたいな関係ができてしまう。見てしまった責任を果たすように、天の声は私に要請する（原田 1989, p.2）。

原田正純は医師として見てしまった責任を果たすべく、患者さんに寄り添いながら医療行為や新たな被害者の発見などに尽力した。

記録映画作家の土本典昭もまた、なぜ水俣の映画を撮るのかという問いに「私は見たからだ」

と答え、見たことの重さを伝えるのに言葉をつまらせている。ちょうど小さい子供の親になっていた土本が、テレビ番組の制作のために水俣を訪れたとき、水俣病の子供の患者さんを見てしまった。彼らが不条理な仕打ちを受けながらも無垢のまま天真爛漫に生きている姿は、土本のなかに激しい義憤を呼び起こし、その後の活動を動機づけることになる。

しかしながら、映画作家としての土本のスタンスは、支援者のそれとは大きく異なっている。

見るのと撮るのでは雲泥の差があった。私は撮ることで、この人たちとの関係を映像にもちこみ、この映画を媒介に水俣病を思考することになったのである（土本 1988, p.296）。

ここから、撮る人としての、映画作家としての土本の独自の思考と実践が始まる。映画作家は、患者さんやその家族ではないし、医師でも支援者でもない。映画作家としての土本は、水俣病と向き合いながら、映画を通じて何をどのように考えたのだろうか。

ただ見るだけの苦しみ

端的な事実として、映画を撮っても「病気そのものは消えることも軽くなることもない」ということがある¹。映画作家はカメラを通じて「見る」ことしか、「撮る」ことしかできない。見てしまった責任を果たそうとしても、そのままただ見ていることしかできない。映画作家は、家族のように患者さんを愛することも、支援者のようにかかわることも、医師のように健康を気遣うこともできない。土本は、映画作家としての自分を「患者の全的理解者でも代弁者でもあり得ない自分」と規定している。そればかりか、患者さんの側に立とうとする映画作家は、しばしば「ペテン師」に身を堕しかねない。ペテン師は、家族のように愛したり、支援者のように支えたり、医師のように健康に関与したりできないにもかかわらず、そのような期待を振りまいて、相手の姿を映像として盗みとる。

土本は、患者さんや家族、ときに支援者をも含めたコミュニティに対して、つねに「よそ者」であることを自覚し、そうあることにつとめ、東京弁によってインタビューをし続けた。そのように距離を取ることで、映画作家ははじめて映画作家として「ペテン不能な「関係者」」に、「対象者の表出をうけとめるに値する撮影・記録者」になることができる。記録映画作家とは、土本の場合には、愛するのでも支えるのでもない立場から、撮ることだけを通じた「関係」を切り結ぼうとする者のことである。

たしかに、患者さんや家族の苦しみを少しでも目にしたならば、あるいはその闘いの力強さや人間性に充ちた美しさに心惹かれたりするならば、何かせざるをえない気持ちに駆り立てられる。しかし、映画作家は、ペテン師にでも

ならないかぎり、当事者の苦しみに近づいた気になることはできない²。患者さんと同じ身体を持つことはできないし、家族のように運命をともしたり、支援者のようにともに生きたりすることもできない。

患者さんの苦しみがわかるのかと問われるとき、土本は答えている。「その苦しみがわからないという苦しさがわかるか」と言いたい、と（土本 1979, pp.243-44）。映画作家の立場に徹すれば徹するほど、自分には何もできないことに気づく。所詮は見るだけしか、撮るだけしかできないことの苦悩は、どれほど深かったことだろう。芸術家やジャーナリストや研究者など、表現を通じて水俣に関係する者は、このような苦悩を理解できるかもしれない。作品を生み出しても、記事や論文を書いたとしても、患者さんの生活や社会状況を変えることはできない。いつかその地を離れてしまう「よそ者」によって語られた言葉は、水俣にとっては何か一つの余計なものかもしれない³。しかし、驚くべきことに、映画作家に特有の思考と苦悩は、さらにその先にある。

見せてしまうことの罪

撮るしかない映画作家は、まさに「撮る」という映画固有の営みにおいて比類ない困難に直面する。見てしまった責任を果たそうとする映画作家の試みは、最初の一步目で大きな挫折を迎えている。土本がはじめて水俣病の患者さんにカメラを向けたときの経験は、次のようなものであった。ある集落の家の軒先で、何気ない日常風景を撮影しようとしたときのことで

ある。そこに小さな子供の患者さんがいて、カメラは意図せずしてその姿を収めてしまう。そのとき、あたりの雰囲気は一変し、そこにいる女性たちから非難の怒号が発せられる。子供を抱きかかえて家に入った母親に詫びに行く土本は、次のような声を聞いたという。

うちの子はテレビのさらしものじゃなか。何でことわりもなしに撮ったか、おまえらはそれでも人間か。わしらを慰みものにするとか。——あやまってすむとか。みんなしてわしらを苦しめる。写真に撮られて、この子の体がすこしでもよくなったか。寝た子ば起こして（土本 1988, p.297）。

「見てしまった責任」を果たそうとする最初の正義感は、ここで完全に打ち砕かれた。それどころか、このとき土本は映画作家として死んだとも言える。映画は、患者さんの身体を、顔を、さらには声をありのままに記録して、人前にさらけ出してしまう。映画は、被写体の姿を撮って、見せることしかできない。これが患者さんを「慰みもの」にすること、「苦しめる」ことでなくて何だというのだろうか。カメラで撮ることの暴力性を思い知ったとき、土本のなかには、もはや映画を通じて水俣に関わることはできないという思いがよぎったに違いない。映画は被写体のプライバシーを犯すので、撮れば撮るほど患者さんを傷つけてしまう。とすれば、映画作家をやめるしか、少なくとも映画作家として水俣と関わることをやめるしかない。見ることしかできないだけでなく、撮ることで傷つけてしまうことを自覚したとき、その絶望は

どれだけ深かっただろう。

にもかかわらず、この挫折と絶望の底から、土本はある決意をしている。映画が患者さんのプライバシーを犯してしまうのであれば、映画作家はこのことを逃れられない罪として引き受けるしかない。見てしまった責任をはたそうとする映画作家は、見せてしまう罪を徹底的に背おうことになる。このことは「記録映画作家の原罪」と呼ばれている。

撮影時の挫折のすえに完成された、水俣に関する最初の作品『水俣の子は生きている』（1965年）には、患者さんの顔写真に貼られたテープを剥がすシーンがある⁴。これによって土本は「患者のプライバシーなるものを破る」ことを映像的に宣言して、以後、患者さんのクローズアップを盗むことに執着する。しかしこれは、逃れられない罪に対しての開き直りではない。

こうして患者の全人的な領域に立ち入るとき、私は映画で犯すことから始まったプライバシーを更に極限までつまびらかにしていく自分に気づく。[...] 私はそこでただつき合いつづけるから許してほしいというほかはない。おそらくすべてを許されることは決してなく、一生その関係をまると背負うことしかないであろう。だが映画で記録することをしごとと決めた私にはこれしかなく、喜びも辛さも渾然たるなかでころげてゆくしかほかはない（土本 1988, p.301）。

一生つき合いつづけるから許してほしい。この言葉は文字どおりに受け取るべきである。土

本の映画制作の営みは、自らの犯していることの許しを乞う営みであり、原罪の償いという意味を帯びることになる。そして彼は、およそ40年に渡って十数本の水俣関連の作品を生み出すことになる。土本は、記録映画作家の原罪を引き受け、その許しを乞いつづけた。あの母親の声は、映画を撮る土本の耳に鳴り響きつづけた。

共感の行方

土本は水俣病の苦しみがわからない「よそ者」として、患者さんに共感できないというスタンスをとった。むしろ土本の共感とは別の方向へと向かっている。患者さんの苦しみは共有できないが、その一方で、チッソ社長の江頭豊や島田賢一と自分が同じ経験をしている可能性が指摘される。株主総会や賠償金交渉において患者さんに対峙した歴代の社長について、次のように語られる。

どのシーンを撮るときも、そのとき母親の放った肉声を内耳に聞かずにはおられない。この質の声は昭和45年株主総会席上、江頭豊社長（当時）が聞き、昭和48年、裁判直後の直接交渉の席上、島田賢一社長（当時）がしかと聞いたはずである。私はこれをフィルムにとどめた。この質の声を撮影し録音するとき、私には江頭氏であれ島田氏であれ、決して無縁の人ではないのである（土本1988, pp.297-298）。

土本が自らと同じ声を聞いた者として挙げ

るのは、加害企業のトップや不作為によって加害行為を黙認していた行政や政治の側の人間たちである⁵。とりわけ、チッソ社長の島田賢一への冷めた分析は、近親者のみになされうる鋭利なものになっている。あの声を聞きながら企業人であり続けるしかなかった島田賢一は、人間として崩壊せざるをえなかった⁶。土本はここで、あの声を聞いてしまった者の絶望と葛藤の映画を構想し、チッソ社長と土本自身との深い関係へと思考をめぐらせている。

患者さんへ共感できない「よそ者」の思考は、さらに別の方向へも向かって行く。土本は、「チッソを憎み、患者を想う人」たちではなく、「患者を憎み、チッソを想う人」たちと映画でかわるにはどうすればよいかと自問する。たとえば、不知火海のある漁協の組合長が土本らを手厚くもてなしながらも、「わしら漁民の生活を脅かす患者を憎んどります」と告げたと言う。土本はそのような人へも一定の理解を示そうとする。むしろ彼らの「人生観」をききつくし、その背景にあるものを映画によって明るみに出すことができるかもしれない。彼らの声を聞く映画づくりをしたときに、漁業者もそのプロセスに共感を持ち、彼らのほうから水俣病映画に近づいてくれるだろう。

むすび

土本は水俣の記録映画を作ることで、いったい何をしたことになるのだろうか。見てしまった責任を果たすべく映画を撮りつづけることで、患者さんを晒しものにし、傷つけてしまう。また、患者さんの苦悩を共有できないが、加害

者との縁を見いだし、加害者と自分との関係に思考をめぐらせる。

このようなスタンスの背後には、原田医師のいう「見てしまった責任」の発想と同時に、映画のもつ力への深い確信があるように思われる。水俣の患者さんが苦悩し、闘い、安らぐ姿を見てしまった者は、何らかの責任を果たさずにはいられない。私たちはそのような姿を映画のなかにも見いだすことができる。そこに患者さんの姿が克明に写っているのであれば、それを見た者は、見てしまった責任を果たすだろう。

土本自身もまた見てしまった者であり、その責任を負わざるをえない経験をしている。それゆえに、見せてさえしまえば、そこで何かが起こるといふ確信をもっている。土本の映画は、患者さんの側に立っていない人にこそ見られるべきである。見せてしまうことによって、見てしまった責任を多くの人が感じる。映画作家が撮ることの原罪を背負い、その許しを乞えば乞うほど、映画を見た人たちのなかに見てしまった責任が広がっていく。ついさっき、私たちは土本の映画を見てしまった。患者さんの声をきいてしまった。

文献

原田正純『水俣が映す世界』日本評論社、1989年。

土本典昭「映画に何ができるか」、『わが映画発見の旅 不知火海水俣病元年の記録』、筑摩書房、1979年。

土本典昭「記録映画作家の原罪」、『水俣病映画遍歴 記録なければ事実なし』水俣語りつぎ2、

新曜社、1988年。

付記

本稿は、シネマ・フィロソフィア 3.11 上映・講演会（2017年12月10日高知県立県民文化ホール）の配布資料に掲載された文章に最低限の加筆修正を加えたものである。本稿は科研費・基盤研究(C)(17K02178)の助成を受けて執筆された。

注

¹ 再生不可能な脳の神経細胞が破壊される水俣病には治療法がないため、医者も病気を治癒できるわけではない。しかし、医学は診断や対処療法などをすることで、患者さんの健康に関与している。

² このような姿勢は、私たちが遠方の他者に対して文脈を欠いた共感をすることを戒めているように思われる。

³ 地域貢献に取り組む大学人にとっても、この問いは大きな意味をもつだろう。大学が大学であるかぎり、地域にとって「よそ者」であり、大学の取り組む地域貢献事業は、私たち大学人の業績づくりのために行なっているかもしれない。にかかわらず、それは地域のためと位置づけられ、地域の人たちから歓迎されることもある。こうした私たちがペテン師でないと、どうして言いきれぬのだろうか。

⁴ 桑原史成氏による胎児性患者（坂本しのぶ氏、半中永一氏）の写真に貼られていたテープが剥がされる。

⁵ この声をきいた者として、三木武夫や石原慎太郎などの環境庁長官の名前もあがっている（土本1988, pp.297-298）。

⁶ 「社長のモラリスト、信心のあつさ、潔癖といった資質もにじみ出した。にもかかわらず水俣病事件史の負を背おう当面の資本の代表者として、人間の城に日々が入り、壊れ、機能停止し、そしてついに「逃げてさるき」「這って出る」人間しか演じられなかった。この歴史の審判とも言うべきものもつ間尺の長い評価に立つとしても、彼は患者に敗れるべくして敗れ、人間的に崩壊した

のである。私は彼のなかにも「私」を見、「私」と私の葛藤にまでその映画を高めるべきであった。しかし私にはそこまでに才覚がなかった。彼に対しても実名と実の肖像をとった以上、私にはそうすべき責任があるといま考え到るのである」として、島田社長との映画上の関係を十分に築きえなかったことを後悔する（土本 1979, pp.247-248）。